

現場にとことん通って、
分かったこと。
同じアスリートから見ても、
レーシングドライバーは究極です。

3回の五輪出場など、バレーボールの
トップ選手として活躍した大林素子さん。
モータースポーツとの関係は少々意外か
もしれませんが、実はスポーツキャスター
としてのデビューがF1中継。

以降、モータースポーツ番組のキャス
ターを担当するなど、活躍の幅を広げてい
ます。今回クリスタルキーパーを施工さ
せていただきながら、お話を伺いました。

大林素子

MOTOKO OBAYASHI

1967年6月15日生まれ。東京都出身。
バレーボール東京都中学選抜、名門八王
子実践高校を経て、日立入社。ソウル・パ
ルセロナ・アトランタと3度の五輪出場。
95年にイタリアセリエAで、日本人初の
プロ選手としても活躍。97年に引退後
「F1 GPニュース」などのキャスターを10
年以上担当。現在はバレーボールの解説
のほか、タレント、舞台女優など幅広く活
躍中。

免許を取ったのは25歳の頃。

運転があまり得意ではないので、
助手席専門です(笑)

昔のアスリートは寮生活が中心
で、車の免許を取るのには「法度とい
う時代だったんです。私と中田久美
さんが、現役中に免許を取ってもい
いという先駆けだったと思います。

25歳の頃に免許を取ったんですけ
ど、実際に車に乗り始めたのは、一
人暮らしを始めてからです。家と体
育館まで歩いて5分だったのであま
り乗る機会はなかったのですが、と
りあえず車を買って(笑)。

私は今も昔も、運転は正直ちょっ
と得意ではないし、できれば助手席
がいいんです。モータースポーツ番
組のキャスターをしてきて、上手い



ドライバーに乗せていただく機会が
多かったのですが、助手席専門になっ
てしまったというか(笑)。当時は仙台
や鈴鹿のレースへ行くのに便乗して、
一緒にサーキット入りしたり、帰っ
たりもしました。警沢ですよ。フェ
ラーリに乗せてもらった時は、エン
ジン音があまりに大きすぎて、会話
どころじゃなかったんですけど(笑)。

今も、友達がほとんど免許を持っ
ているので、ちょっとドライブへ
行ったり、仕事帰りに乗せてもらっ
たりしています。ただ、仕事や取材
でいろいろ回る時、衣裳や荷物を
持って移動するのが大変なので、車
があると便利だろうなと思うことは
よくありますね。

試合会場への15分のドライブが
大切なリラックスタイム

一番運転したのは、大阪での選手
時代です。毎日10分、15分ですが、
乗っている間に気持ちを高めたり、
歌を歌ってリラックスできる特別な
空間でした。

愛車を持ったのも、その当時の1
回だけ。25歳の時は車に興味がなく
て、「とりあえず移動手段で持って
いた方が便利だよな」という感覚で
した。私はピンク色が好きなんです

が、今みたいに車のカラーリングが
多くなかったのが、愛車は全然こ
わりなく選んで後悔。のちにフィッ
トやヴィッツのピンク色が出てきた
時に「これ買ったのに！」と思いま
した(笑)。

日常で運転しなくなっただけから
は、もう18年経つんです。常日頃から運
転をしなければ慣れますけど、車は
自転車に乗るみたいなスピードでは
ないですし、安全性に最大限気を付
けなければいけない。だからやっぱ
り、助手席です(笑)。

スポーツキャスターの
車への価値観がチェンジ

そんな単なる移動の手段だった車
の存在が、大きく変わったきっかけ
は「番組」です。

私、スポーツキャスターとしての
初仕事で、F1イタリアGPだった
んです。その後、モータースポーツ
番組を10年以上みっちり担当して、
2011年に卒業したんですけど
も、一番長い番組でした。

元々、セリエA時代にイタリアに
住んでいたのですが、サーキットに
は行く機会がなくて。初めてイタリ
アGPへ訪れた瞬間、「ここだ、こ

こが私の居場所だ！」と。音やニオ
イを含めて、不思議なほど普通に馴
染めました。その後、無知で車の運
転も苦手だった私がモータースポ
ーツの世界にハマっていったのは、番
組を通じて出会ったドライバーや解
説者のおかげです。真のプロから最
高峰の話聞けることで、車の価値
がどんどん上がっていきました。

インタビュールされた経験が
あるから分かること。
心を開くカギは「知識」

番組を担当していた頃は、付き合
う人や生活も全部、車一色。国内レ
スではできる限り足を運び、テストや
工場を自費で取材、国内A級ライセ
ンスも取得しました。

私なんてまるきり素人でしたし。
結局、専門職じゃない人に話される
のは一番イヤなんです。バレー
だって、違う競技の人が話すとやっ

